

潰瘍性大腸炎に対する白血球除去療法について

透析技術認定士 河原聖志

潰瘍性大腸炎とは、大腸の粘膜に炎症が起こり、びらん（ただれ）や潰瘍ができる病気です。厚生労働省より特定疾患に指定されており、10～30歳ないし50～60歳台の方に多く見られます。現在、日本人の罹患数は約10万人とされています。

主な症状ですが、大腸に起こる炎症のために、下痢や腹痛、粘血便（血液・粘液・膿の混じった便）、血便などがあります。さらに悪くなると、発熱や体重減少などの症状があらわれます。

潰瘍性大腸炎の起こる原因は未だにはっきりと分かっていませんが、刺激を受けた白血球から炎症にかかわる様々な物質が放出され、それらが腸管粘膜に炎症を起こすと考えられています。

治療方法は大きく分けて、薬物による内科的治療と手術による外科的治療になり、内科的治療と外科的治療の「橋渡し」をする位置に白血球除去療法があります。白血球除去療法とは、血液を一度身体の外に出し、白血球を除去するフィルターを用いて血液中から炎症を引き起こす白血球を取り除き、浄化された血液を身体に戻す治療法です（図1）。

実際の治療ですが、まず、左右の腕に少し太めの針を刺します。一方の腕から血液を身体の外に取り出し、フィルターを通した後、反対側の腕に戻します。ベッドに横になっていただきますので大きな動作はできませんが、座ってテレビを見る程度でしたら大丈夫です（図2）。治療時間は約1時間で、この間に1500～2000mLの血液がフィルターを通ります。治療中は私が付き添い、患者さまの状態と体外循環を常に観察させていただいております。

白血球除去療法の適応ですが、厚生労働省の治療指針では「ステロイド抵抗性の中等症以上の全大腸炎型および左側大腸炎型」の症例とされています。治療を受けられた方のうち70%以上で主な症状である血便・腹痛・潰瘍が大幅に改善され、頭痛・腹痛などの副作用の出る患者さまは1～5%未満です。なお、治療中に血液中の白血球数は減少しますが、これは炎症の原因となっている悪い白血球を減らしているからです。この間も新鮮な白血球は身体の中で作られていますので、治療終了後すぐにもとの数に戻ります。

吉島病院では、日本消化器病学会専門医の岡原医師・松村医師のもと、患者さまの安全を最優先に治療にあたらせていただいております。何かご不明な点がございましたらどうぞお気軽にお問い合わせください。

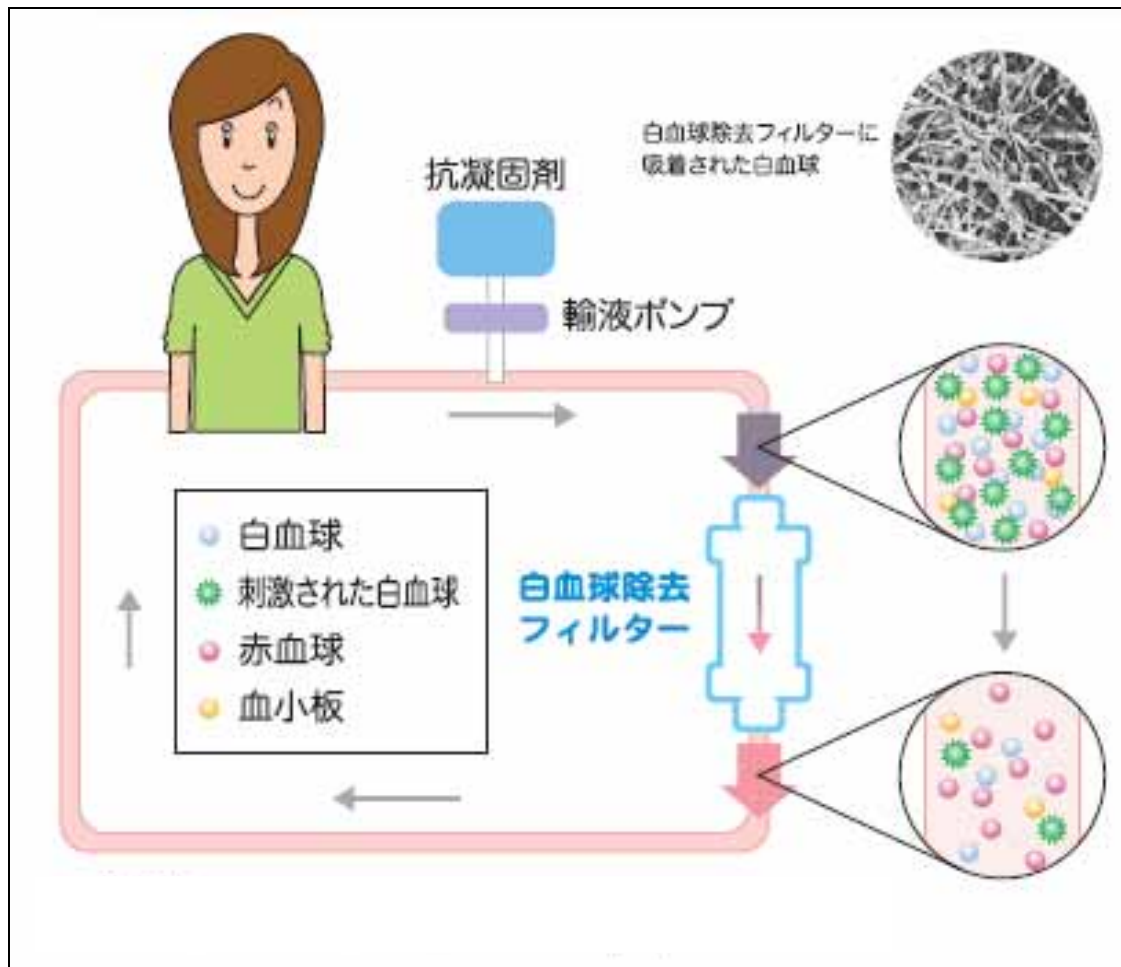


図 1 . 白血球除去療法の概念図

一方の腕から取り出された血液は、フィルターを通りもう一方の腕へ戻ります。その間に、大腸に炎症を起こす刺激された白血球を除去します。赤血球は除去しませんので、この治療による貧血の心配はありません。

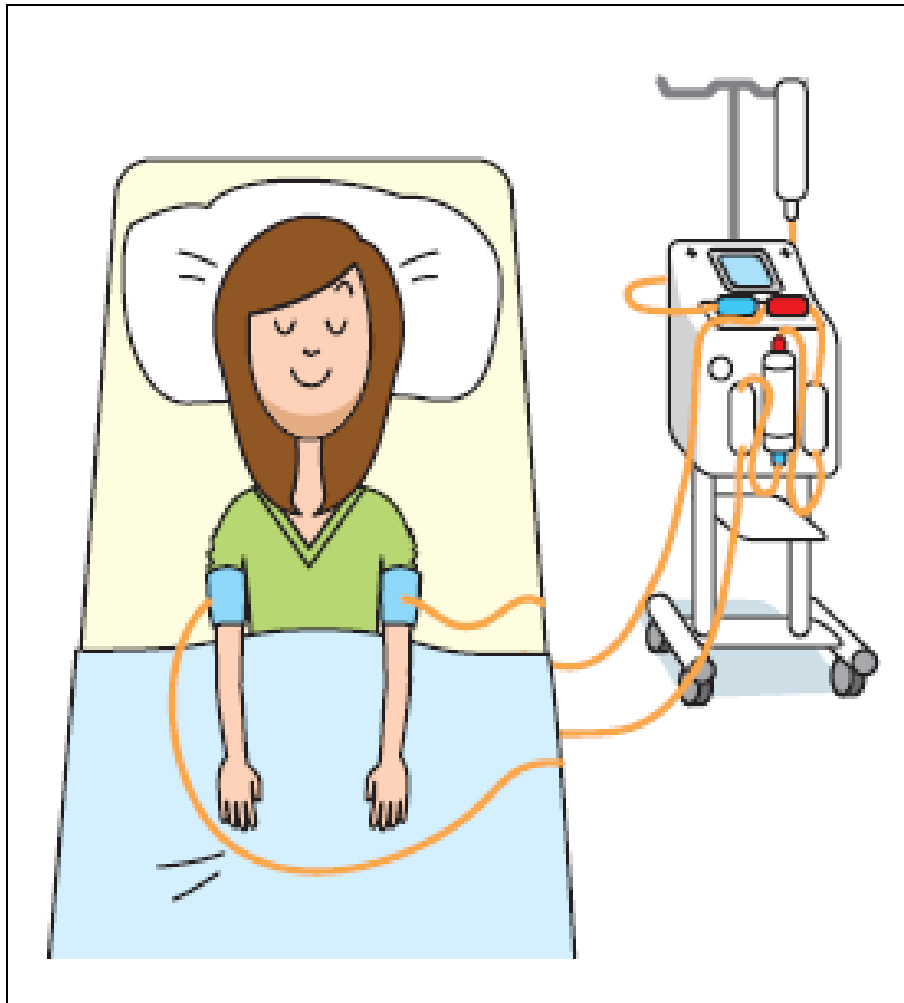


図 2 . 治療中の様子

約 1 時間、ベッドに横になっていただきます。楽な姿勢でテレビを見たり、会話も自由です。